

保育者養成校における保育実習前後と保育実習での学びの実効性の一考察（1）

～実習前後の学びと実習経験の繋がりに着目して～

A Study of the Effectiveness of Learning Before, During and After Childcare Practice in Childcare Training Colleges : Focusing on the link between pre- and post-practice learning and practical experience.

津村 樹理 山岡 伊公子

Juri TSUMURA Ikuko YAMAOKA

抄録

近年、保育実習に有効な実施方法・内容などについての考察や提言が行われ、今後の実習指導につながる様々な知見が先行研究から明らかになっている。本研究では、実習後の学生が保育者を目指す中でどのようなことを求めどのようなことが役に立っているのか、実習の成果や実習に係る授業内容の実効性を確かめたいという考えのもと、まずは実情を把握すること、そして今後の実習指導の質の向上を図るために、学びと実習経験の関連を探っていくこととした。そして、実習後のアンケート調査を通して実習とそれに付随する授業から学生が何を学んだのかを客観的に分析した結果、調査校での実情が明らかになったと同時に、いくつかの課題を得た。今後の保育者養成においての実習事前事後指導などの授業の更なる充実に向けての取り組みを省察、検討した。今後も課題に取り組みながら保育現場に必要とされる人材育成の充実を目指したい。

キーワード：保育者養成、保育者の資質・能力、事前事後の学び、保育内容

1. はじめに

保育士資格取得のため、保育実習は中心的科目であり必須科目である。また保育実習は校内での理論的な机上の学びと共に、理論的な学びと実践現場での体験を現場で実際に体験したことをこれまでの学びと結び付け実践力をつける絶好の学びの場である。保育者養成校は保育実習前後の保育内容の授業での学びや学生指導、保育実習などを通して保育者の専門性を高められるようそれらの保育内容の精査や実習・授業での、学生指導などを通して、保育者の専門性を育てていくことが責務である。

近年子どもを取り巻く社会環境は大きく変化しており、加えて保育所・認定こども園、幼稚園など保育形態も多様な中、保育者養成校には次に示される通り、実践力のある質の高い保育者の育成が更に求められている。

保育士養成課程等検討会（2010）では「保育現場の実情を踏まえ、実践力や応用力をもった保育士を養成するため、実習や実習指導の充実を図り、より効果的な実習指導にすることが必要」と報告されている。

このような基本方針に基づき、本学のシラバスのもと主に次のように授業が組まれている。「子どもの発達」「保育記録の取り方」「保育指導計画の立て方」「3つの資質・能力」「5領域の保育内容」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」など実際に授業を進める中で、学生には具体的に学べるよう教員の保育実践経験を活かした実例を挙げながら教授している。保育実習の事後指導において実際には学生にどのように役立っていたのか、実習の成果や保育実習にかかる授業内容の実効性を確かめてみたいという思いが常にあった。

厚生労働省の子ども・子育て支援推進調査研究事業による全国保育士養成協議会の行った保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究(2017)では、「卒業後に保育現場で定着を図る観点等から、効果的な実習方法を検討することが求められている。効果的な実習の成果は、保育士養成施設の教育の向上に寄与するとともに、保育現場での保育の質向上にも反映できるものである」とし、保育実習に関する有効な実施方法・内容などについて考察、提言を行っている。この研究から今後の実習指導につながる様々な知見が得られた。

本研究でも実習の成果や保育実習にかかる授業内容の実効性について本学の学生の姿をつかみ、今後の実習指導の質の向上を図るため、学びと実習経験の関連を探っていくこととする。

2. 研究の目的

本研究は保育実習Ⅰ・Ⅱを終えた学生に対し行ったアンケート調査を分析することを通して、学生の実習とその前後に関する学びの現状を明らかにする。そして、保育実習にかかる授業の実効性や実習の成果とのつながり、実習指導においてどのような学びや課題があるのか、保育の実践力や実習に役に立つ学びを明らかにすることを目的とする。

3. 方法

(1) 調査方法及び調査集計

- 1) 調査期間： 2022年12月
- 2) 調査対象： 保育者養成課程のあるA県内にある教育学系のB短期大学における、2回の保育実習を修了した学生83名(うち男性：4名、女性：79名)
- 3) 調査材料： 質問用紙1枚
- 4) 調査方法： 授業内において質問紙調査法にて行う。
- 5) 調査項目： このアンケート調査紙は、平成29年に厚生労働省による子ども子育て支援推進調査研究事業である「保育実習の効果的な実施方法に関する調査」の研究報告で用いられたアンケートを基に作成した。採択理由としてはこのアンケートの目的と本研究の目的が一致したことによる。質問1～6の6部構成となっており、6つの上位項目とその下位項目として①～⑩の質問内容に分類して問いを立てている。質問1では「実習態度」に関する項

目で①～⑧の内容、質問2は「施設の役割・子ども理解」に関する項目で⑨～⑮の内容、質問3では「保育内容・環境」⑯～㉓の内容、質問4は「保育の計画・記録」に関する項目で㉔～㉗の内容、質問5は「保育者の役割」に関する項目で㉘～㉚、質問6は「実習で役立ったと思う学び」についての各質問内容である。そして、質問1～5は選択式、質問6は自由記述形式である。

- 6) 集計分析： 数量的データについては、統計手法を用いグラフ化し、自由記述については文字データ化し、適宜カテゴリーに分類して使用した。

(2) 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり以下の点について配慮した。

質問紙調査は所属する大学の研究倫理委員会の研究倫理規定チェック項目に従い承諾を得て実施し、本学研究委員会にて承認を得た上で、調査を実施する際には対象者に十分な説明を口頭と書面で行い、目的や内容に同意の上、同意書を得て行った。

説明内容としては、個人や組織が特定されないこと、回答した質問紙は研究以外の目的で使用しないこと、研究への協力は自由であること、協力をしなくても不利益にはならないこと、そしてエピソードや対象者からの言葉等を使用する際の個人名は匿名とし個人が特定される内容は伏せることを説明した。また、目的として、研究の成果は今後の授業の充実を図るために使用する旨を伝えた。

また回収した書類は鍵のかかる場所に保管し個人情報の保護にあたっている。

4. 結果

(1) 調査対象者の概要

年代としては、10代が16人、20代が67人、30代が3人である。

表1) 調査対象者(人)

年齢	～19歳	～29歳	～39歳	合計	総合計
女性	16	60	3	79	83
男性	0	4	0	4	

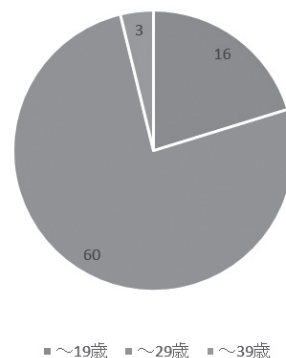


図1) 調査対象者

(2) 実習における学びについて

上記アンケートの結果を以下の表2に示す。

	項目	まだ身につけていない		実習Ⅰにおいて身についた		実習Ⅱにおいて身についた		実習前に身についた	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
実習態度	①遅刻や早退・欠勤などせず実習できる	2	2%	3	3%	4	5%	77	90%
	②実習のねらいや目標を明確に意識できる	1	1%	26	30%	37	43%	22	26%
	③自らの実習課題を明確に意識できる	1	1%	27	31%	39	45%	19	22%
	④保育士の助言を素直に受け止め、行動できる	1	1%	30	35%	18	21%	37	43%
	⑤保育士に疑問など質問できる	3	3%	28	33%	28	33%	27	31%
	⑥子どもの人権やプライバシーの保護の大切さを理解できる	0	0%	21	24%	7	8%	58	67%
	⑦言葉づかい、挨拶、返事、服装など、保育士としての基本的な態度が身につく	1	1%	22	26%	10	12%	53	62%
	⑧率先して自らやるべきこと、役割を見つけて取り組める	2	2%	25	29%	31	36%	28	33%
子どもの役割・施設の役割	⑨園が担っている子どもや保護者に対する役割や機能を理解できる	7	8%	33	38%	32	37%	14	16%
	⑩一人一人の子どもをよく観察し子どもの特徴や興味・関心を理解できる	5	6%	37	43%	27	31%	17	20%
	⑪園・施設が作成する保育の記録を通して子どもの特徴や興味・関心を理解できる	11	13%	32	37%	30	35%	13	15%
	⑫一人一人の子どもの発達過程を理解できる	8	7%	29	34%	31	36%	20	23%
	⑬子どもの発達状態に応じた援助や関わりができる	10	12%	27	31%	32	37%	17	20%
	⑭分け隔てなく子どもと接することができる	2	2%	24	28%	20	23%	40	47%
	⑮保育士の動きや連携の様子をよく観察し、保育士の実践の意図を理解できる	5	6%	23	27%	39	45%	19	22%
保育内容・環境	⑯園・施設が立てている計画の内容を理解できる	9	10%	37	43%	23	27%	17	20%
	⑰園・施設が行っている子どもの発達過程に応じた保育の内容を理解できる	6	7%	39	45%	24	28%	17	20%
	⑱子どもが主体的に遊べるように関わることができる	5	6%	34	40%	22	26%	25	29%
	⑲個と集団性の関係性を理解して関わることができる	7	8%	34	40%	23	27%	22	26%
	⑳子どもの生活援助（食事・排泄・着脱の援助など）ができる	5	6%	31	36%	34	40%	16	19%
	㉑音楽や造形、運動など基本的な表現技術が身につく	10	12%	30	35%	27	31%	19	22%
	㉒子どもの健康や安全面に配慮した関わりができる	3	3%	34	40%	26	30%	23	27%
	㉓保育士が構成している保育環境の意図が理解できる	7	8%	32	37%	34	40%	13	15%
計画・記録	㉔誤字・脱字なく、丁寧な文章で実習日誌などの記録を書く	18	21%	26	30%	32	37%	10	12%
	㉕実習日誌などの記録に基づいて実習を振り返り、自らの実践を改善できる	6	7%	35	41%	37	43%	8	9%
	㉖昨日までの子どもの姿に応じた指導計画を立てることができる	14	16%	22	26%	40	47%	10	12%
	㉗発達段階や子どもの状況に応じた教材・素材を用意・作成することができる	11	13%	25	29%	41	48%	9	10%
保育者の役割	㉘保育士が行う仕事の目的や内容を理解できる	5	6%	38	44%	29	34%	14	16%
	㉙職員間の役割分担や連携の内容を理解できる	9	10%	31	36%	34	40%	12	14%
	㉚自己の課題を認識し、その解決に向けて学び続けることができる	3	3%	29	34%	32	37%	22	26%
	㉛保育士として適切な行動規範を子どもに示すことができる	6	7%	25	29%	36	42%	19	22%

表2) 質問①～⑤の結果

上記の表をもとに上位項目である6つの質問項目に分類して、以下の図2～図6に示し結果を記す。

①質問1：実習態度に関する項目

図2より「①遅刻や早退、欠勤などせず、実習できる」「⑥子どもの人権やプライバシーの保護の大切さを理解できる」「⑦言葉づかい、挨拶、服装など保育者としての基本的な態度が身につく」の内容で、60%以上の学生が「実習が始まる前に身についた」と回答している。これは、実習事前の授業の短期間だけで得られることだけではなく、これまで育ってきた環境の中で身につけてきていることが示唆されている。また①、⑥、⑦以外の実習態度に関する全ての内容で、「まだ身につけていない」と答えた学生は4%以下であった。②、③、④、⑤、⑧の項目はそれまでの経験や実習事前授業での学びによって身につけてきたと捉えることができる。

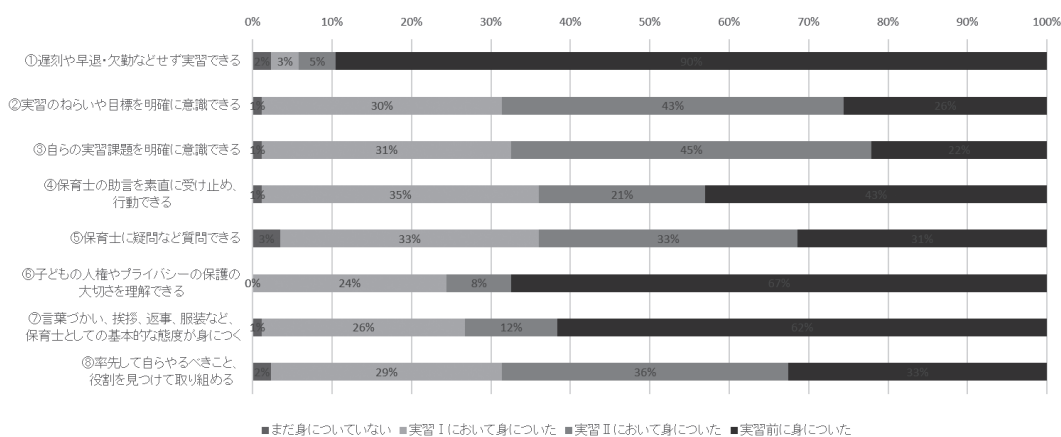


図2) 質問1：実習態度に関する項目

②質問2：施設の役割・子ども理解に関する項目

本項目の「⑭分け隔てなく子どもと接することができる」の内容では実習前に身についたという回答が46.5%と過半数近くを占め、実習までに身につけている資質としてみられる。それ以外の「⑩園・施設が作成する保育の記録を通して子どもの特徴や興味・関心を理解できる」「⑫一人一人の子どもの発達過程を理解できる」「⑬子どもの発達状態に応じた援助や関わりができる」「保育士の動きや連携の様子をよく観察し、保育士の実践の意図を理解できる」などの内容は、事前授業での学びや体験を重ねた実習での学びの積み重ねであろうと推察できる。ただ「⑩園・施設が作成する保育の記録を通して子どもの特徴や興味・関心を理解できる」の内容について、「まだ身につけていない」という回答が他の回答より多少多くあったが、実習生には、園児の個人情報を変えないとする園もあるため、難しかったのであろう。質問⑩からのつながりから、「⑬子どもの発達状態に応じ

た援助や関わりができる」の内容では「まだ身についていない」という回答が他よりも多かったのは、2週間の実習では身につけにくいことであることがうかがえる。

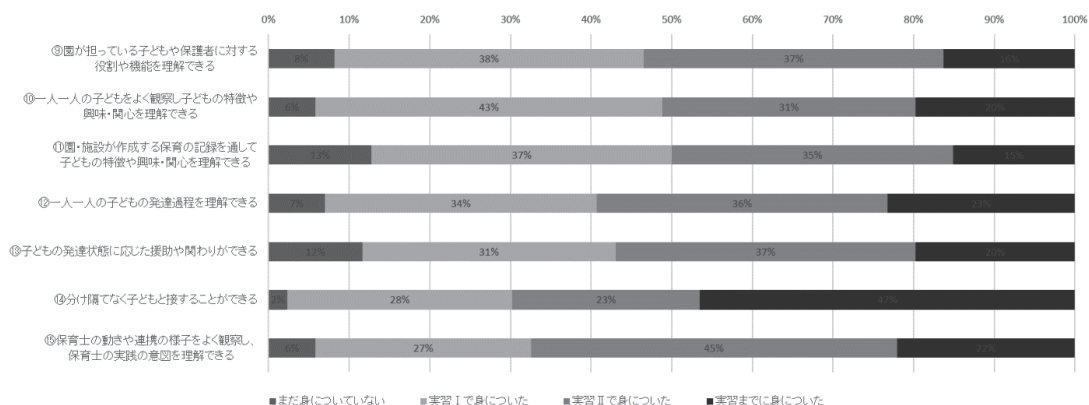


図3) 質問2：施設の役割・子ども理解に関する項目

③質問3：保育内容・環境に関する項目

本項目では、以下の図4より、質問⑩⑪⑬⑭⑯⑰⑱など20%以上が実習前に身につけていること、そして実習I、IIとそれぞれにおいて身についたと回答していることに関しては、事前の授業内容や各実習の成果が反映されていることとして示される。また保育技術としての「音楽や造形、運動など基本的な表現技術が身につく」の項目である⑰は、実習事前の授業のみならず学生の学修以前からの得意、不得意の影響が関連しているものとする。

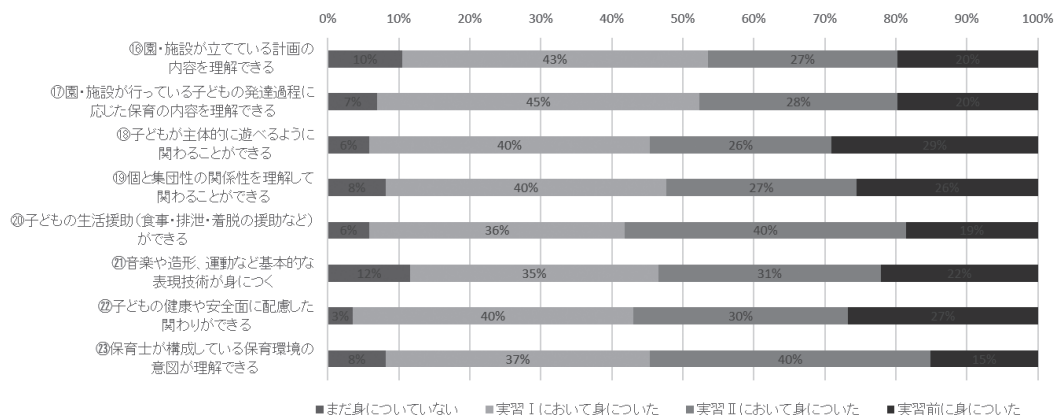


図4) 質問3：保育内容・環境に関する項目

④質問4：保育の計画・記録に関する項目

ここでは以下の図5から、事前授業の学びよりも強く実習を経験する度に身についたことを実感していることがわかる。しかし、「まだ身についていない」とする回答も他の項目の回

答よりも多く、特に「㉔誤字・脱字なく、丁寧な文章で実習日誌などの記録を書く」は20%以上の割合で学びが足りないと考えていることが示された。これは質問1の内容同様に短期間で学修は難しくそれまでの学びや経験が問われるものである。「㉖昨日までの子どもの姿に応じた指導計画を立てることができる」「㉗発達段階や子どもの状況に応じた教材・素材を用意・作成することができる」の項目では各15%前後の割合での回答があり、2週間の実習期間では担当する対象の年齢や発達による「子ども理解」が、事前授業や実習だけでは難しいことが示唆され、実習後の学びも引き続き求められていることがわかる。

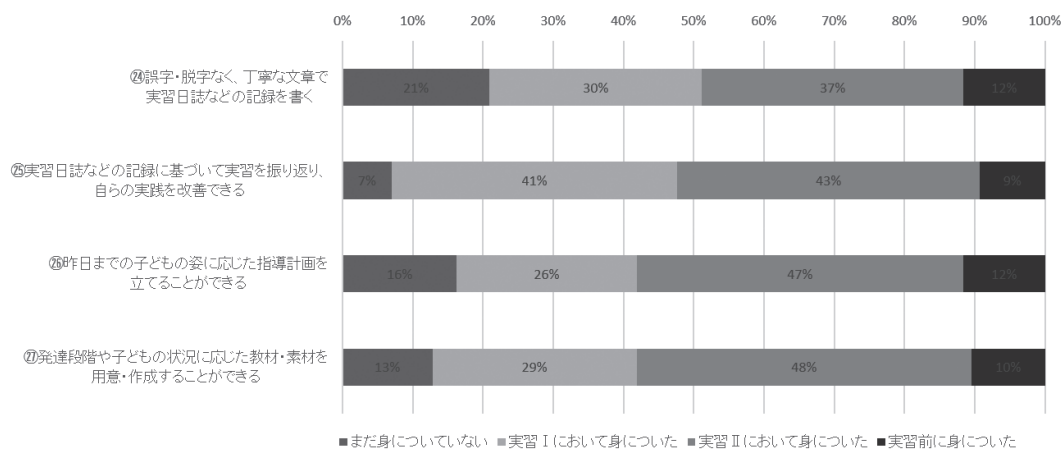


図5) 質問4：保育の計画・記録に関する項目

⑤質問5：保育者の役割に関する項目

保育者の役割に関する項目では、以下の図6より「実習 I において身についた」「実習 II において身についた」とする回答が同じような割合で一定数見られた。㉘～㉚の項目内容は、実習で現場経験をすることで理解できる項目であるため、回答から多くの学生に実習の成果が見られるということが示されている。

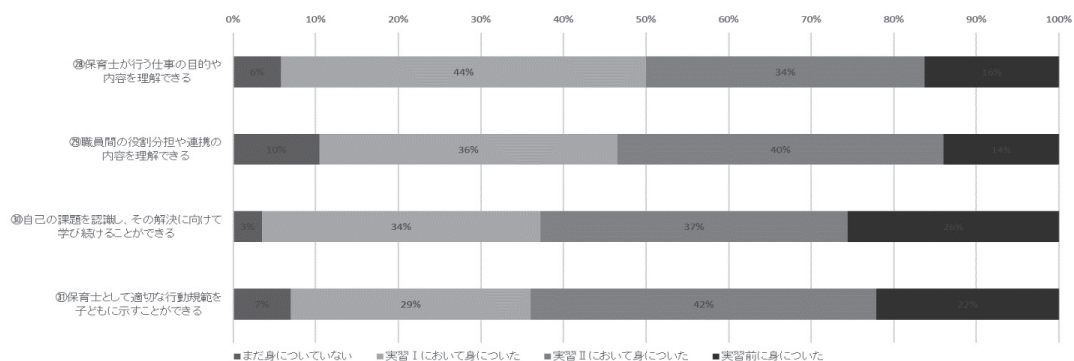


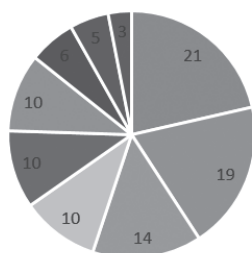
図6) 質問5：保育者の役割に関する項目

⑥質問6：実習で役立ったと思う学び

回答は複数回答であり83名中60名から回答（「特になし」、無回答を除く）が得られた。表3からも見てとれるように指導案作成、実習日誌の書き方、模擬保育の実施、手遊び、わらべうた遊びなど、現場で即実践に役立つものが多い傾向にある。また面談については実習の心得等の社会的規範に関わる内容を事前を知ることができて良かったことや実習の自己課題について直接助言を受けたことが役に立ったという回答がみられた。また、中には「(保育者になるために) 自分自身の生活を見直すことが必要だと思った。」という発言もあった。以下、表3において回答内容を分類した。なお、回答内容に関しては書面の都合上、一部抜粋して記すこととする。

表3) 実習で役立ったと思う学び（回答内容は一部抜粋、原文のまま）

カテゴリー	度数	%	回答内容
指導案作成	21	25%	<ul style="list-style-type: none"> ・設定保育で指導案を書くときに参考になった。 ・指導案を書くときの重要なポイントが学べた。 ・実際に書くときに戸惑うことがなかった。
実習日誌の書き方	19	23%	<ul style="list-style-type: none"> ・日誌にかく言葉づかい・ポイントなどが理解できた。 ・一つ一つ項目についてどう記載すればよいかわかった。 ・授業で学んだこと、配付物など参考にスムーズに書けた。
模擬保育	14	17%	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に自分がする時、参考にできた。 ・子どもへの言葉がけや言葉づかいがわかった。 ・実際に演習することができて設定保育で役立った。
絵本の読み聞かせ	10	12%	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな絵本に出会えてよかった。 ・子どもの前で読める絵本が増えた。 ・読み方やもち方まで学んだことを発揮できた。
手遊び・わらべうた遊び	10	12%	<ul style="list-style-type: none"> ・実習中にできるレパートリーが増えた。 ・臨機応変に対応できるようになった。 ・実際に行うことで子どもの目線にたてた。
実習の心得	10	12%	<ul style="list-style-type: none"> ・実習園に行く際に気をつけられたり、スムーズに準備できたりした。 ・言葉づかいや実習の心構えがわかった。 ・実習生としてのふるまいがわかった。
お礼状の書き方	6	7%	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の使い方などわからなかったことが多かったのでやっておいてよかった。 ・今まで書く機会がなかったので、助かった。 ・書き方がよくわからず困っていたので授業や参考資料が役に立った。
子どもの発達段階	5	6%	<ul style="list-style-type: none"> ・適切なかわり方や配慮を知り、実践できた。 ・指導案を考える時に役立った。 ・年齢に応じてどこまで支援すればよいか分かった。
実課題等についての面談	3	4%	<ul style="list-style-type: none"> ・教員からのアドバイスを実習に活かすことができた。 ・次回の実習に向けて自分が頑張る目標を立てられた。 ・実習Ⅰの反省を実習Ⅱで活かすことができた。



- 指導案作成
- 実習日記の書き方
- 模擬保育
- 絵本の読み聞かせ
- 手遊び・わらべうた遊び
- 実習の心得
- お礼状の書き方
- 子どもの発達段階
- 実課題等についての面談

図7) 実習で役立ったと思う学び

5. 考察

上記4章での結果をまとめ、事前事後の授業と保育実習での学び、授業内容の改善などについて各質問内容に分類して考察を述べることとする。

(1) 実習態度について

回答の結果から、これまでの経験と授業の学びの中で学生自身の保育者としての資質向上のために今後取り組む必要のある項目がみられた。

実習までに役立った授業では「実習の心得」、「お礼状の書き方」、「実習課題等についての面談」など自己を振り返り、実習に向けて課題をもって意欲的に取り組めるような内容を教授してきたことが「役立った」との回答もみられるが、「②実習のねらいや目標を明確に意識できる」、「③自らの実習課題を明確に意識できる」の項目で、「実習前に身についた」とする割合が他と比べて低い。また「実習Ⅰにおいて身についた」よりも「実習Ⅱにおいて身についた」の割合の方が高い。これらの項目は実習態度に反映するため、実習前に身につけられることが望ましい。また実習態度は人間性や性格が如実に表れるため、保育者を目指す学生として、子どもにとっての人的環境「モデル」であることを自覚して常に自己を振り返りながら「人間」としてどう生きてらよいかについて日頃から考えておくことが重要である（佐藤, 2003）と言われるように、養成校としても学生一人一人と丁寧に関わりながら育てていきたいところである。

(2) 施設の役割・子ども理解

「実習前に身についた」と回答した割合が比較的多かったのが「⑭分け隔てなく子どもと接することができる」という資質的要素の部分である。それ以外の項目については実習園での学びの成果ということが示されている。特に子ども理解を深めるという点では実習で担当教員らの指導を学生がどう受け止めるかによって子ども理解に関する学びが深まるか否かに影響をうけると示唆されていること、また（実習園における）実習指導担当

教員との関係性が良好な場合、担当教員から受けた指導を試し、子どもの行動に変化を得た経験を積み重ねることで子ども理解に関する学びが深まったとの報告もある（高橋・川田, 2021）。それらの知見を活かし、授業での学びと実習での指導を融合させ、園・施設や子ども理解を深めるためにも、養成校としてあらためて実習事後指導の重要性を再認識し、じっくりときめ細やかに面談等で対応したり、実習園との連携を密に図ったりしながら学生が成長を感じられるように関わる必要があることがわかる。

(3) 保育内容・環境

「⑮園・施設が立てている計画の内容を理解できる」の項目で「まだ身についていない」とする割合が他の項目よりやや多い10%の回答があった。実習生との事後指導面談では、園・施設によっては実習生に教育課程などを提示しないと話した学生がいたことが反映されていると考える。「⑳音楽や造形、運動など基本的な表現技術が身につく」の項目でも、「まだ身についていない」とする割合が(3)の項目の中でもっとも多い12%になっている。これはピアノ奏や歌唱、様々な造形の手法、運動能力など保育技術に関わる場所であるが、個人の得手不得手の影響が現れたと考える。保育実習Ⅱ後の指導面談においても、学生から保育技術の向上が今後の課題の一つに挙げられることが多かったことが反映されている。しかし、保育実習Ⅰで身についたとする割合と、その後の保育実習Ⅱで身についたとする割合が増えていることは、保育現場での学びの成果が示されたと考える。そして保育を実際に経験することの重要性が改めて示唆されたことで、養成校として保育者としての専門性の獲得につながる学びの内容や個人指導などのさらなる取り組みの充実を図ることは言うまでもない。

(4) 保育の計画・記録

「㉑誤字・脱字なく、丁寧な文章で実習日誌などの記録を書く」で「まだ身についていない」とする割合が21%にのぼる。これについて山田・野上（2013）は保育実習日誌を通して仕組みの理解や記録に必要な保育場面をとらえる視点や要点をつかみ文章化する技術を繰り返し経験しながら身につけておくことが必要とし、実習日誌は保育者に求められる記録による振り返りの実践者となる土台として大変重要な意味をもつと述べている。これは保育者として実践力向上に記録を書く力の重要性が示されている。また佐藤（2012）は学生の文書表現など国語力の低下を危惧し、基礎学力向上のための取り組みを紹介している。実習日誌など記録を書くことの意義や重要性を理解させ経験を積むこと、記録を書くのに最低限必要な文章能力育成の実態をつかみながらその向上に努めることは急務であると考えられる。「㉒昨日までの子どもの姿に応じた指導計画を立てることができる」という項目でも「まだ身についていない」とする割合が16%、「㉓発達段階や子どもの状況に応じた教材・素材を用意・作成することができる」13%である。これはもちろん経験や学びの不足もあるだろうし、2週間のうち1週間交代でクラスに入る、あるいは年齢毎に3～4日毎

など園側の受け入れ態勢事情による影響も考えられる。前者は、養成校として集団での学びの内容を精査しながら取り組む必要がある。そして後者については、園・施設との密な連携・理解を得ることが今後も必要であると考えられる。

(5) 保育士の役割

「㊸職員間の役割分担や連携の内容を理解できる」の項目で「まだ身についていない」とする割合が10%ある。3歳未満児クラスは複数担任であるため役割分担や連携の様子をみてよく理解できていたが、3歳以上児クラスで実習した学生はその様子を見る機会がなかったと振り返っている。これらをふまえると2週間の実習期間では役割分担や連携場面などの経験の差が回答に反映されているのではないかと考える。養成校としては実習前に実習園で学ぶ内容として「保育者間の役割分担や連携」を挙げているが、更に場面を捉える視点や姿勢をもつことに気付けるように授業内容を工夫する必要があると考える。その他の項目を見ると実習で保育現場を経験することによって理解が深まり、学びの姿勢をもち続けることの意識が保たれていることが示されている。保育士の役割を理解することで自分の理想とする保育者像を更に明らかにし、それを目指してさらなる学びへとつながることを期待したい。

(6) 特に実習に役立ったと思われる学び

指導案作成や実習日誌の書き方についての記述が多かった。これらは役立ったと思われる反面、アンケート調査では、まだ身についていないと回答されている。前述したように、実習日誌など記録を書くことの意義や重要性を理解し経験を積むこと、記録を書くのに最低限必要な文章能力育成の実態をつかみながらその向上に努めることは保育者養成校にとって最重要課題の一つであることが明確となった。模擬保育についても役立ったとする回答の中で、「計画するだけでは気付かなかった配慮や留意点が学べた」、「保育準備の甘さに気が付いた」など客観的に省察することで学び得た回答が多かった。実習では自身の保育計画の立て方や実践に寄与したものとする。実践的な内容の学びを深めながら実習前にできる限り身につけられるよう授業内容の取り組み方を更に工夫していくことが責務であることを再認識する。

6. おわりに

(1) まとめ

本稿では、学生の実習とその前後に関する学びの現状を明確にすることと、保育実習にかかる授業の実効性や実習の成果とのつながりや課題を明らかにすることを目的に行った。そして、上記5章では「実習態度」、「園・施設の役割・子ども理解」、「保育内容・環境」、「保育の計画・記録」、「保育士の役割」、「保育実習に役立った学び」からなる各視点で保育者養成校における保育内容の実効性について考察してきた。

その結果を総合的に捉え、学生が一番難しいと感じる保育記録や保育指導計画作成においては全くできないのではなく学びの途中にあり実習事前の授業から実習、実習事後での一連の学びから継続し続けていること、学びと共に保育観が育てられると同時に人的環境モデルとしての保育者像を描き目指す姿として自身の経験を確認する（確認するようになる）こと、そして学修の学びだけではなく自身の生活や生き方を立ち返って確認しそれらが保育に繋がってくると考えていることが、明らかとなった。

保育記録や保育指導計画作成においては、まだ身につけていないと回答する割合が一番多い項目であったが、同時に、実習で身についたと答える割合も高かったり事前の授業での学び役立ったとの意見も多くあったりし、難しく感じつつも事前の学びは実感しつつ学びの過程にあるということ、これまでの学びが積み重ねられていることが分かった。だからこそ事前の授業の充実に加えて事前指導のみならず、事後の指導でも継続して実習で得た自己課題が解決できるよう指導をしたりや保育記録や保育指導計画からの学びの振り返り作業を行ったりする必要があるということを考える。保育者養成校として、子どもにとっての人的環境「モデル」であることを自覚して常に自己を振り返りながら人として成長していけるような学生への丁寧な関わりと、保育者としての専門性につながる学びの内容の充実、また園・施設との連携、理解を得ていくことの重要性が改めて示された。

またそれぞれの結果に共通する点として短期間の学びだけでは身につけ辛い内容もあった。それは、重成ら他（2011）も保育者養成校入学後の学びやそれ以前からの経験も大きく関与すると示唆されているように、学生自身の経験の積み重ねの重要性は明らかである。保育者養成校での学びを日々「どのような学びを得たか」と振り返る経験を積み重ねること、加えて実習の事前事後指導のみならず他専門科目との保育実践現場を意識した教授内容の連関も欠かすことはできない。

(2) 今後の課題と検討事項

それぞれの視点で考察した保育者養成校としての課題に取り組むとともに、今回の研究で明らかにされていない保育者の実践力向上の重要な要素である、保育者の資質・能力についての調査研究に取り組む必要があると考える。林・森本（2014）は、保育実践力として「文章力」「保育展開能力」などを求める現場の声が多いが、「思いやり」「信頼と責任感」など実践力よりも資質・能力に対する重要度が高いことを示した。学生の言葉や話を基に、保育現場で求められる資質・能力や学生の現状を踏まえ身につけることが必要な学びについて明らかにしていきたい。

また、文部科学省や厚生労働省などの規定に基づいた上で、学生の求める授業と実習、保育実践現場の求める実習前の学びを、シラバス分析などを行うことにより、より必要な授業の見極めと充実化を図れるよう努めたい。そして学生が表面的な技術だけではなくその背景にある理論や根拠を関連付け、保育技術や保育実践に取り組めるきっかけをもてる

ように、バランスのとれた力を育んでいきたい。

7. 引用文献・参考文献 一覧

林悠子・森本美佐（2014）保育者養成校に求められる学生の保育実践能力と資質について 奈良学園大学文化女子短期大学部編（45），123-130.

一般社団法人全国保育士養成協議会（2018）厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営基準について」.

厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』 フレーベル館.

文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館.

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館.

奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会（2019）『教育課程 改訂案「育ちの履歴」から編成する資質・能力を育成するカリキュラム』 奈良女子大学附属幼稚園 研究資料.

佐藤達全（2003）体育科学学生の基本的な行動と礼儀作法の問題点 育英短期大学研究紀要，第20号，43-58.

佐藤達全（2012）短期大学における保育者養成と「保育者論」について 育英短期大学研究紀要，第29号，73-86.

重成久美・篠永洋・吉牟田美代子（2011）保育者養成課程における「環境を通して行う保育」を重視した授業の展開Ⅰ～保育実習Ⅰに向けた強化間の連関を通して～ 活水論文集，第54号，91-101.

高橋真由美・川田学（2021）学生の子ども理解に関する学びに影響を与える要因 子ども発達臨床研究，第15号，11-30.

山田朋子・野上俊一（2013）保育実習Ⅰ・Ⅱの学びの変容を結ぶ事前事後指導 ―保育実習日誌の記述内容と自己評価―，中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要，第45号，49-58.